この部屋から、旅に出よう。 Vol.5

Platform

機械と工場の世界

モノなき仮想に佇む、
モノ言わぬ機械たち。

station

- VRChat：Twilight Cherry Blossoms
- cluster：Industrial garden
- NeosVR：Geometropolis
- Real.W：早稲田鶴巻町・印刷所街

Platform編集部

Platform Vol.5 contents

Gravure: 工業都市 製鉄所 SteelWorks CwanFactory ……4

Twilight Cherry Blossoms VRChat ……14

Industrial garden cluster ……20

Geometropolis NeosVR ……26

早稲田鶴巻町・印刷所街 Real.W ……32

あとがき ……38

第５号のテーマは「工場／機械」。

工場というと大きくて、重くて、暑くて、うるさくてわくわくする場所だと考えてしまう。それはきっと、「そこで何かが新しく生まれる」ということへの期待だろう。

人間は、始めて石を手に持った時から、「何かを作り出す」ことから逃れない運命を背負ってしまったのだと思う。始めは両手しか使えなかったものが、道具を使い、道具を作る道具を作り、それで何かをまた作る。
電脳の中に生まれた工場で、今日は何かが作られるのだろうか。この雑誌を見ながら、生まれる「何か」を夢想してほしい。

編集長

To the next PLATFORM.

世界には、色んな町がある。
その町ひとつひとつに、駅がある。

どの町も駅もそれぞれ違っていて、
違った人たちがいて、
そこを訪れた僕たちが抱く思いも、
きっと違うのだろう。
……VRでも、Real Worldでも。

今はまだ離れ離れの「駅」を、「町」を、
あなたへ繋ぐ線路でありたい。

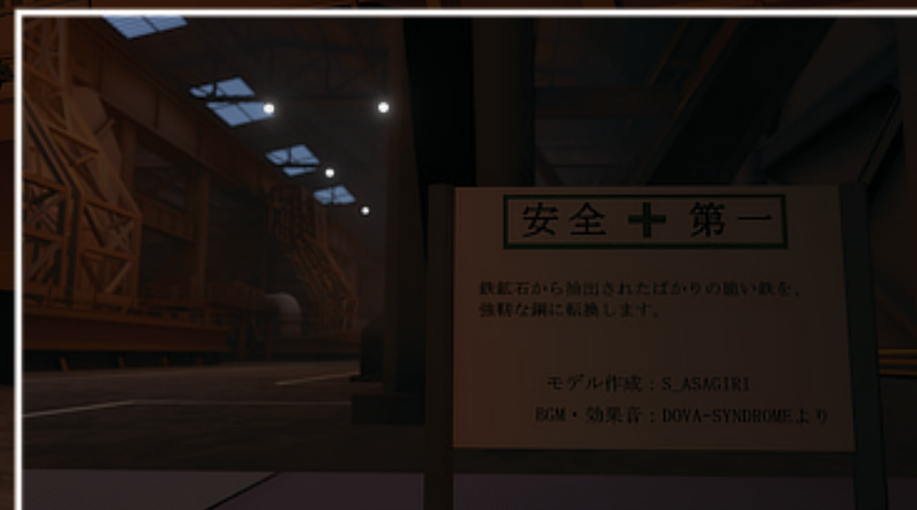
——それが「Platform」

写真／オージュ

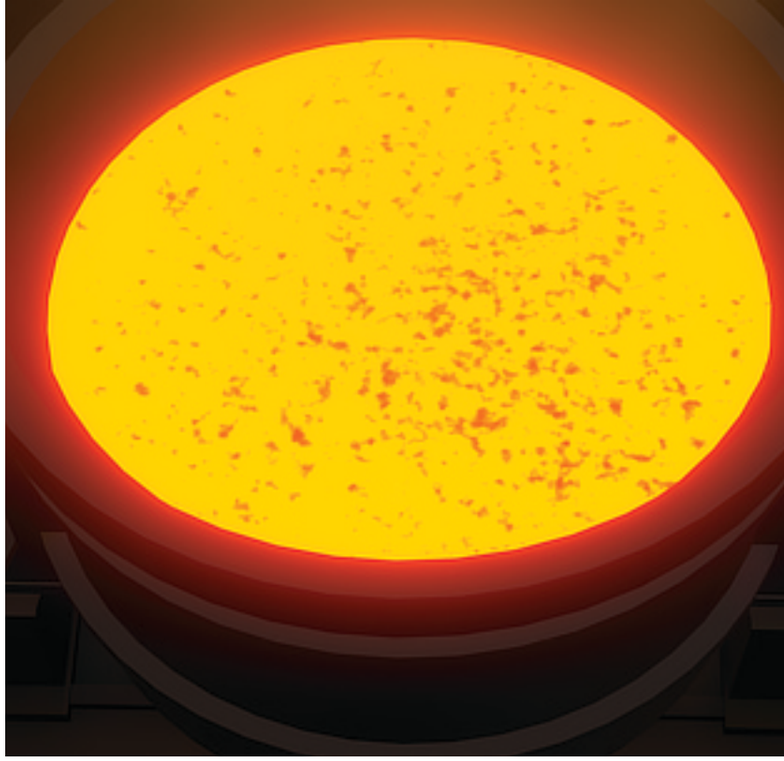
World: 製鉄所 SteelWorks

Created by S_ASAGIRI

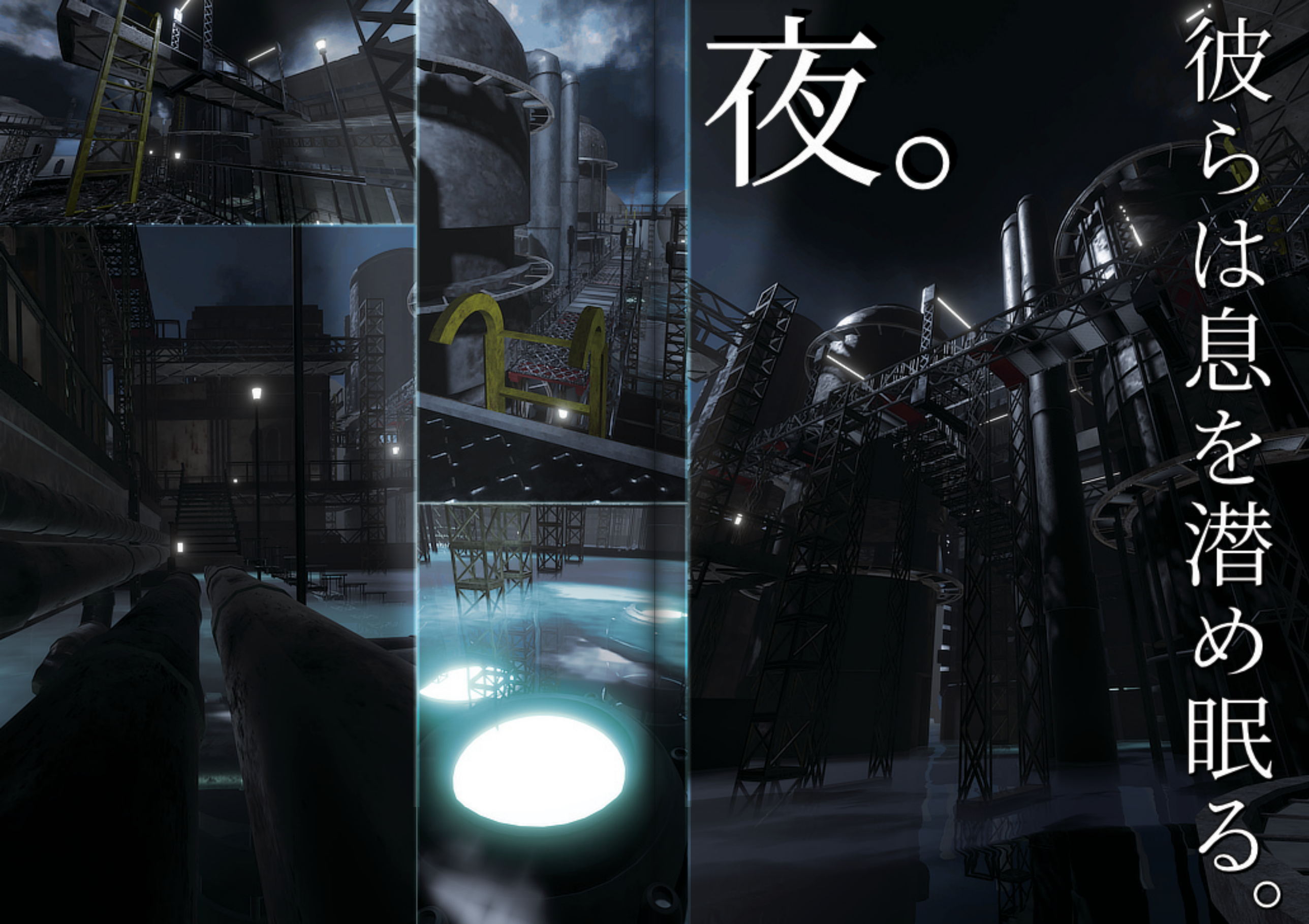
今日も一日、ご安全に。



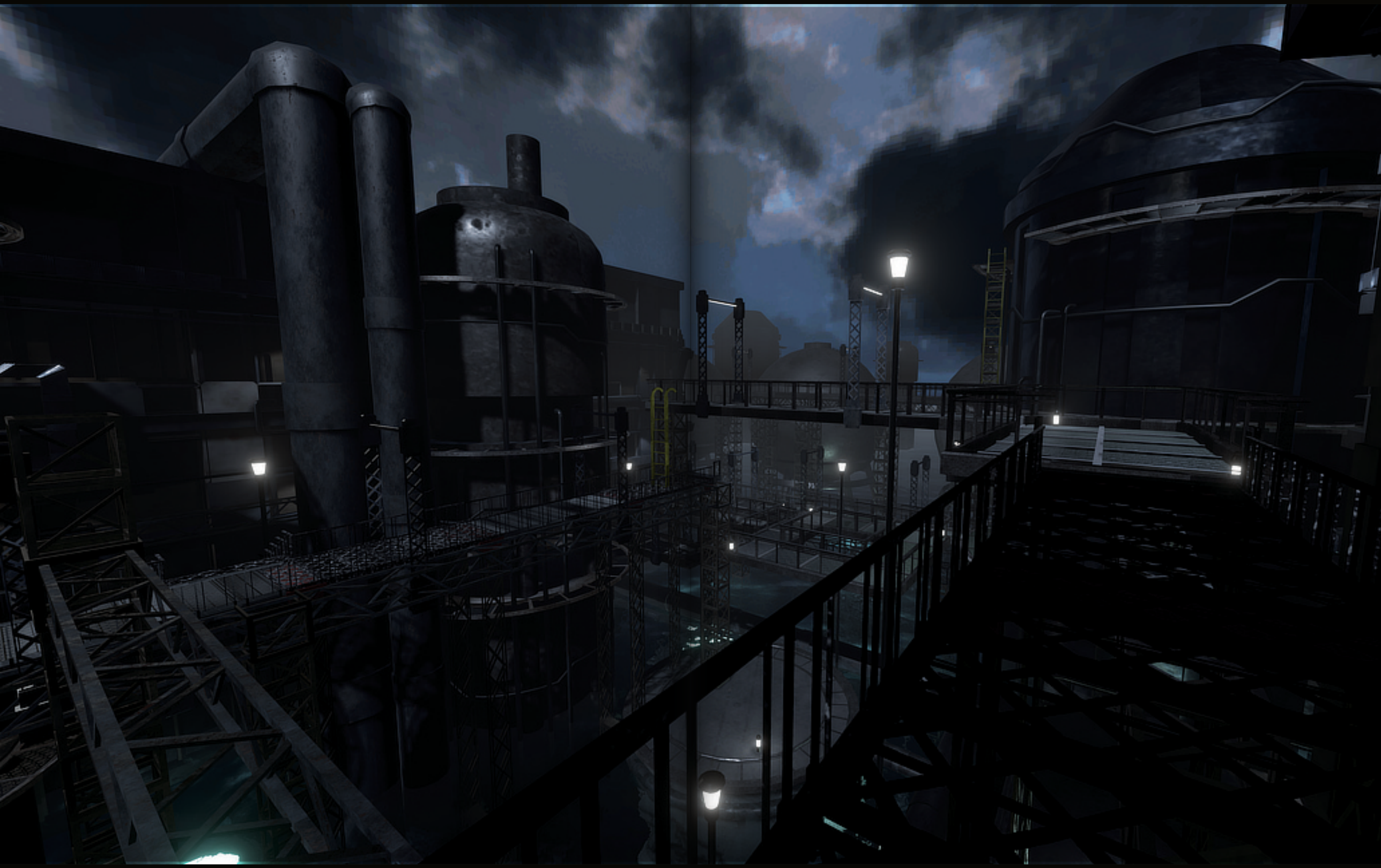
奔れ、
トーピードカー。



滾れ、溶鉄。


夜。
彼らは息を潜め眠る。

Good night, until next morning.

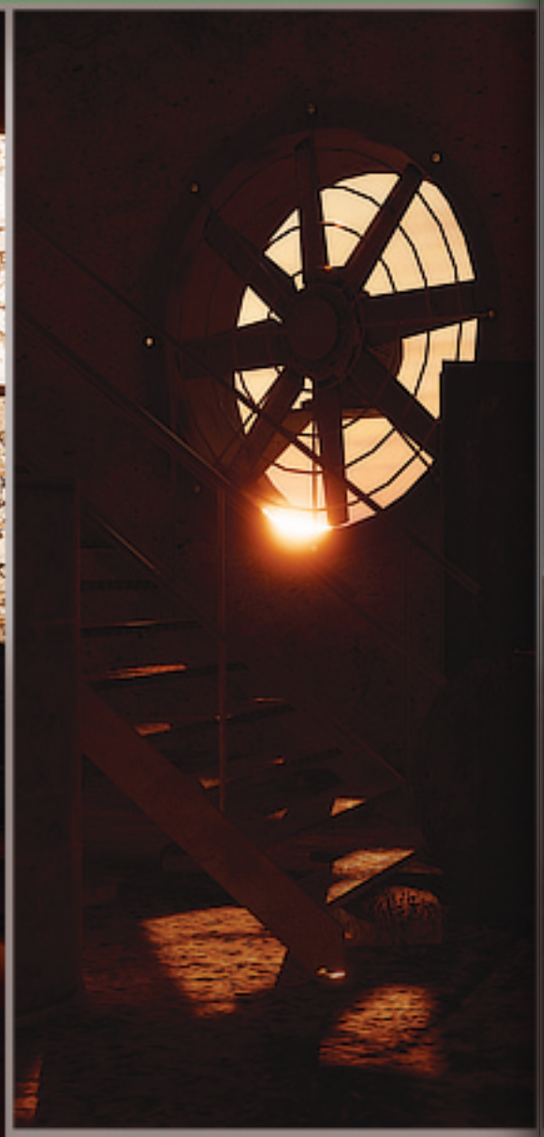


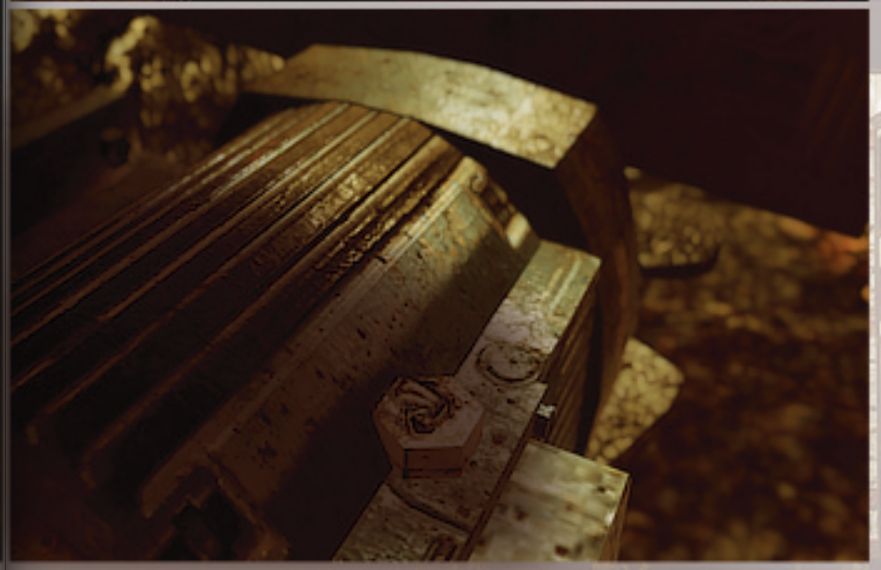
World: CwanFactory Created by しーわん

予熱は春に咲く

写真／Tokikaze

どこか垢抜けた空気と赤錆の香りが閑散とした工場内に立ち込めているように感じる。打ち捨てられてから久しいのであろう広い構内には、未だ生き延びている数個の電球が入口付近を照らしているものの、大半は草臥(くたび)れて眠ってしまったのか工場内部はちらちらと射し込む夕陽が常夜灯のように光るのみで薄暗い。ミミズが這ったように剥がれ落ちたモルタルの壁と、ゆっくりと腰を落としたり未だ精悍に佇むロッカーたち、大型犬のようにどっしりと座っているモーターやドラム缶が、打ちっぱなしのコンクリートの上で立ち尽くす私を出迎えてくれた。きっと何十年も前にこの工場が稼働を止めてからもずっと彼らはここで出番を待ち続けているのかもしれない。割れた窓ガラスの向こうには燦然と咲き誇る桜が白く光っている。その花弁の間を縫うように鼈甲色(べっこういろ)の夕陽が射し込み、構内の支柱に立てかけられた、いつか誰を讃えていたであろう空っぽの額縁を照らしている。側に設(しつら)え





てある、かつて労働の疲労を落とし込んだであろう木製のベンチは、蓄えた重みを逃がすかのように座面の中程から折れて休んでいる。気怠げだが、爽やかでどこか少し熱っぽく、何となくこそばゆい不思議な感覚を覚える場所だな、と思った。

暁を忘れ眠る構内の奥に二枚、大柄な鉄扉が小さく口を開いている。扉に体を預けて中に踏み込むと、天井の高い作業場が広がっていた。床にはロッカーやドラム缶がいくつか寝転がっているものの、二階のギャラリーに張り巡らされた窓から注ぐ夕陽を遮るような作業機器の類は既に取り払われていて、閑散とした空間が取り残されているだけだった。荒涼とした無骨なコンクリートの上に有圧換気扇の影が回っている。彼はかつて立ち昇る煤と熱気で満ち満ちていた構内をせっせと撫でていたのであろう。迸る情熱と金属音のリズムに乗り、いくつもの製造工程を経て搬出された製造機器達は今も何処かで景気の良い音を立てて働いているのかもしれない。今はもう寝静まった光景を撫でるように、ごお、と呟く有圧換気扇が構内を桜の瑞々しい香りで満たしていく。廃工場も春を吸い込んで微かに寝息を立てているかのようにも思えた。

ギャラリーに続く鉄階段を上ると、欠けた窓からうんと腕を広げた桜たちの優しい微笑みが見える。彼らは工場を囲むように伸びていて、彼らを望む何枚もの窓はステンドグラスのように静かにきらめいている。梁には労働後の汗のような赤錆が滴り、ふうと一息落ち着けた、夕陽の色で消え入りそうな白色電灯が下がっている。ギャラリー中腹の鋼橋に足を進めると、一仕事を終えた工場へ労いを込めるかのように桜が輝き、その枝と花弁から夕陽をカラメル色の窓ガラスを通して構内へ注いでいた。

ああ、そうか、彼らはこの廃工場を讃えているんだ。この地に染み込んだかつての工場の熱を吸い込み絢爛の花弁を咲かせ、何年も実直に仕事をしてきたこの工場に、良くやったと、お疲れさまでしたと伝えているんだ。この地に覚えた不思議な感覚はきっと、定

年を迎えた先輩上司に花を渡すような、労働を終えたパートナーにビールを注ぐような、少しくすぐったいあの感覚なのだろう。

工場を出て少し辺りを巡る。桜たちは工場のコンクリートとレンガの肌を撫でるように、掲げるように腕を伸ばしている。夕陽を帯びて光り、笑っているようにも慈しんでいるようにも見える。彼らを見ていると、人の実直に打ち込んだ熱はモノに伝わり、人に伝わり、いつかは花をも咲かせるのだろうと思わされてしまう。私もいつの日かそんな迸る熱を何かに打ち込んでみたいものだ。そのためにはまずあれをこうして、それをああやって……。

ぷつぷつと独り言を呟きながら歩いていると廃工場の裏手にやけにモダンなソファーとローテーブルが集っている場所を見つけた。ここはきっと、かつて工場の一部であったものの、天井が完全に抜け落ちて以降、今は訪れる人々の憩いの場となっているのだろう。テーブルの上にはいくつものコークとジャンクフードが並べられていて、今にも打ち上げが始まりそうな雰囲気だ。まあでも確かに、ずっと打ち込み続けると知恵熱が出てしまうかもしれないからね、たまには息抜きしないと。今日は花見酒でもして帰ろうか、花見コークになってしまいそうだけど、などと考えながら私は夕陽の注ぐソファに腰掛け、窓に映る眩しい桜を眺めた。

お疲れ様！

（文：ヤマノケ）

Twilight Cherry Blossoms
（作：WAPAN）
ACCESS in VRChat

To the next PLATFORM.

中華×サイバーパンク

写真／わく

ターコイズブルーの空、黒い工場、白い煙、赤いネオンサインの独特のある配色が特徴。

工場の空は、トルコ石の色に覆われていた。

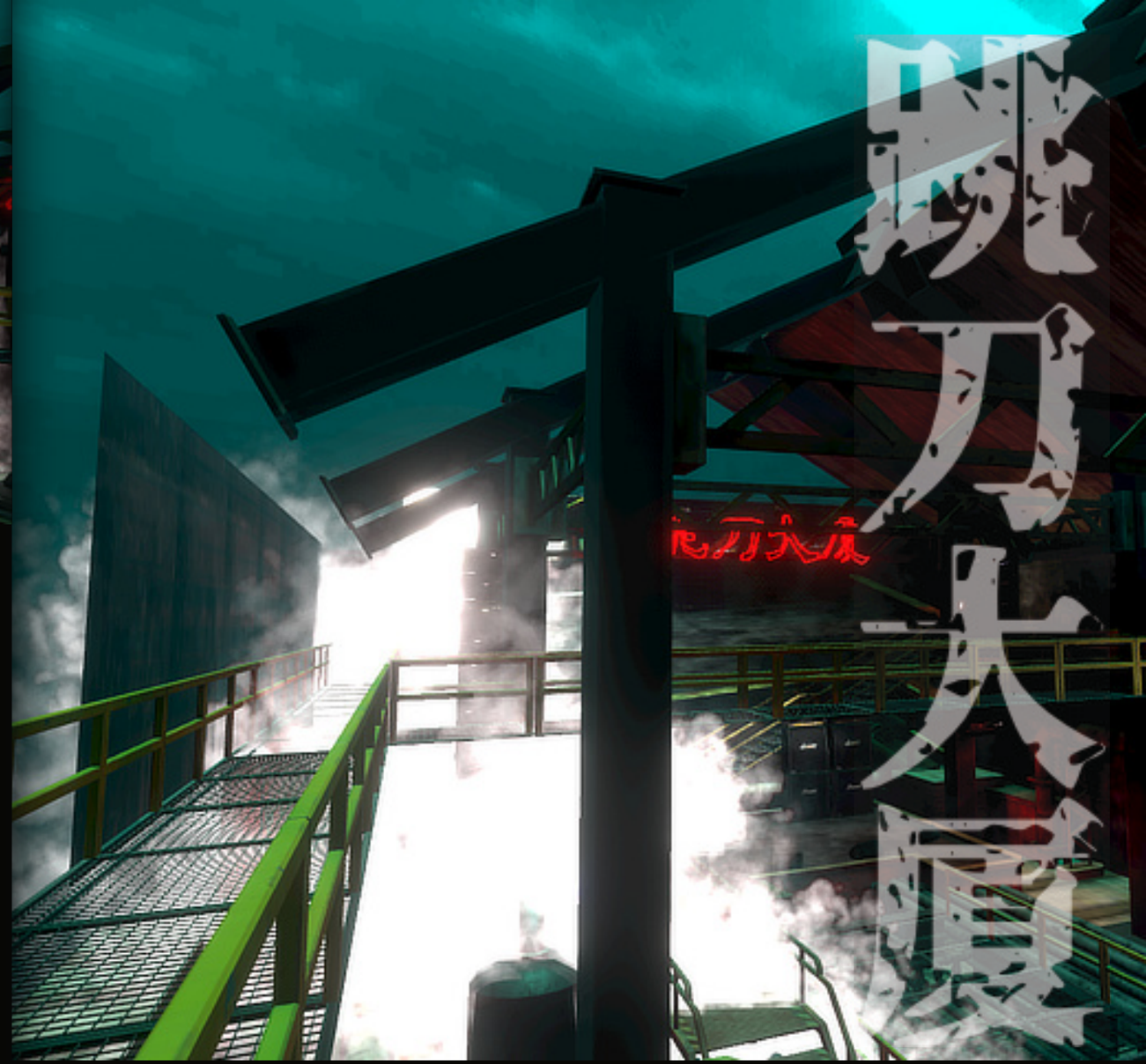
下地としてのターコイズグリーンの空、工場から頻繁に噴き出る白い煙、そして、煙の向こうに輝く「跳刀大厦」という文字の赤いネオンサイン。このワールドを構成するのは、主にこの三色だ。

廃工場には配管やタンク、ドラム缶などが配置されているものの、かつて何を製造していたのかは分からない。時折、配管から噴出する煙は、まるで今でも廃工場が生きている印象を与えてくれる。そして、工場の奥にはスピーカーと共にライブ・ステージがあり、その上には入口と同様に「跳刀大厦」という赤いネオンサインが薄暗闇を切り刻むように強く輝いている。

ここは「industrial garden」。音楽ユニット・跳刀大厦が「工場でライブや撮影をしたい」という目的のために作り上げたワールドである。アジアンゴシックでサイバーパンクな風潮を強く反映しており、インダストリアル・ミュージックでも、デトロイト・テクノでも、工場や廃墟を彷彿する音楽と相性のよいライブ会場だ。

「industrial garden」を散策していて私が気になったのは、「廃工場の中にネオンサインが設置されるのは不自然なのに、なぜ、ここまで相性が良いのか？」ということだ。今回はそのことについて語りたい。

1910年に、フランスのジョルジュ・クロードはパリの政府庁舎にて自ら発明したネオン管を公表した。ネオンは「新しい」を意味するギリシャ語のNeosに由来し

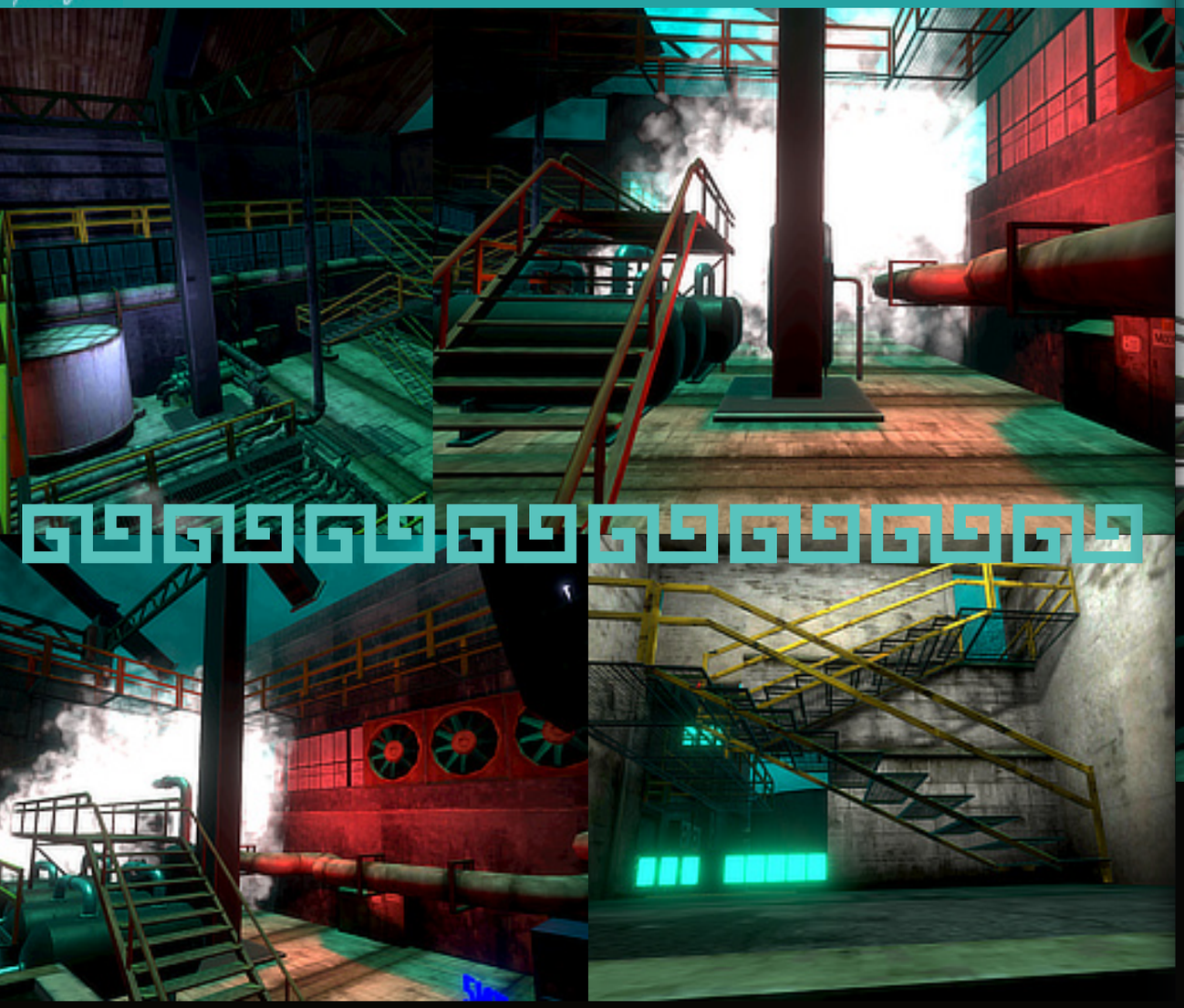


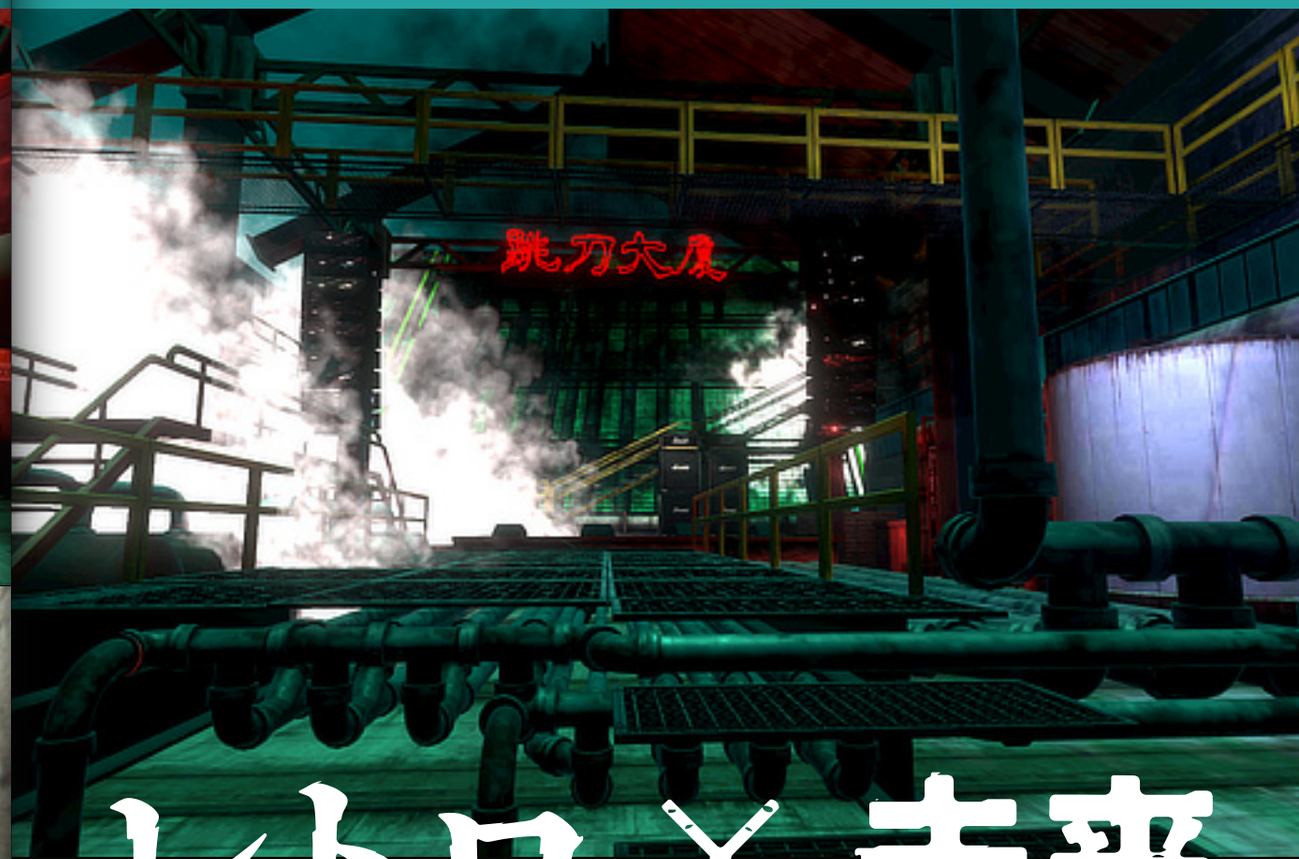
~industrial garden~

by 跳刀大厦

cluster

Created by [u:]





レトロ×未来

煙纏う廃工場

ており、ネオンガスを封入した管に放電することで新たな照明器具として利用することが可能になった。このネオン管を使用した広告が誕生したのは1912年であり、従来の白熱電球を並べた照明看板と異なり、文字の形で光るネオン管（ネオンサイン）は世界中に広がっていった。

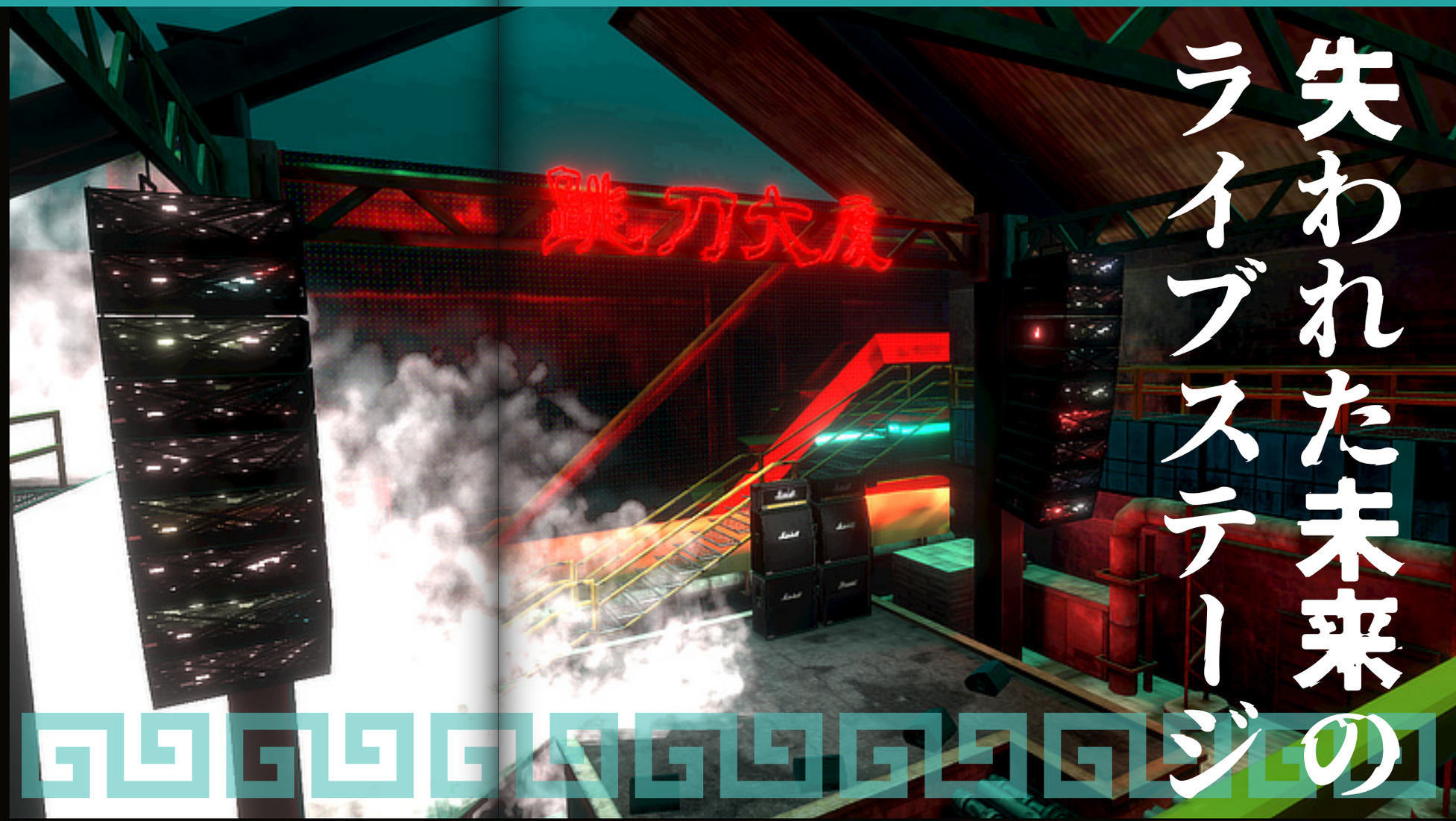
およそ百年前に発明されたネオンサインだが、その意匠は現在でも使われ続けている。

ここ数年間で目覚ましいのは、韓国のニュートロの文脈だろう。ニュートロは「ニュー」と「レトロ」を混在させた造語であり、レトロがある程度はありのままの過去を懐古する趣味であるのに対し、ニュートロは過去を現在の感覚で再解釈し、存在しなかった過去を郷愁と未来の入り混じった感情で味わうことに特色を持つ。韓国ドラマ『梨泰院クラス』のパク・セロイの店「タンバム」のように、店内にフォトジェニックなハングルのネオンサインをあつらえた韓国居酒屋は、日本国内でも人気を博しつつある。

また、「日本人に忖度した味ではなく、中国の地元向けの料理をそのまま出す」ガチ中華の店でも、ネオンサインは人気である。東京・御徒町にある「九年食班」は、1990年代から2000年代前半の中国の雰囲気を「再現」した中華料理店だ。店内は、入口のネオンサインをはじめ、雑貨、インテリア、BGMなど、懐かしさを喚起するもので統一されており、30代の在日中国人から人気だという。

それに対し、東京・大久保にあるニュータイプの重慶料理店「撒椒小酒館」では、ギラギラのネオンサイン、筋骨隆々の金色の招き猫、赤い壁の色など、全てが懐古するにしてはとてつもなく派手である。力強いレトロフューチャー、とでも言えるかもしれない。これは「国潮（グオチャオ）」という2010年代半ば頃に生まれたデザインの潮流であり、中国の伝統的なデザインをモダンに解釈した

失われた未来のライブステージ



跳刀大厦

2020年に中華ホラー配信番組「跳刀大厦」からスタートした音楽ユニット。ボーカルのるなとギターの[u:]の二人組で活動しており、近年はClusterでVRライブを行ったりとバーチャル方面でも活動の幅を広げている。

~industrial garden~
by 跳刀大厦
Created by [u:]

赤いネオンが光る、廃工場。ライブや撮影が利用できるワールド。

ACCESS

ここで一つの疑問が出てくる。「なぜ、屋外広告として使われたネオンサインが、屋内インテリアとして使われる風潮が出てきたのか？」という疑問である。

これは、レトロフューチャーではなく懐古趣味そのものだが、日本では昭和レトロをテーマとした料理店でも表れる風潮である。「薄利多賣半兵ヱ　渋谷道玄坂店」では、養命酒や不二家のミルキーなどの琺瑯看板が、店内の壁に大量に貼られている。

「昭和から続いている居酒屋」と「昭和レトロを反映した新しい居酒屋」の明白な違いは、「屋外広告のはずの琺瑯看板が、屋内インテリアとして設置されていること」である。これらの琺瑯看板は、街角を歩く人に向けた広告として機能しておらず、店内の人々のノスタルジックな過去（昭和レトロ）を喚起するために設置されている。

「industrial garden」の工場の中で妖しく光るネオンサインも、まさにそのような流れで、失われた未来（サイバーパンク）を喚起する依代装置として設置されていると言っていいだろう。『ブレードランナー』で描かれた日本風のネオンサインが妖しく光る２０１９年のロサンゼルスが、現在（２０２３年）からすると過去であると同時に、訪れなかった未来であったように。

つまり、"あの頃"夢見た未来が訪れなかった２０２０年代において、ネオンサインは過去と未来の狭間で屈折した光を灯し続ける「未来の廃墟」なのだ。

１８世紀末から１９世紀にかけて、ゴシック建築や修道院の廃墟を背景としてゴシック文学が誕生したように、ひと昔前の、既に廃れてしまったものには仄暗い想像力を掻き立てる力がある。

廃墟と化した工場へ、夜な夜な訪れる人々。ライブ会場を屈折した光で照らし出す赤いネオンサイン。今宵のライブは、どのような想像力を掻き立てるイベントなのだろうか？続きは是非とも、「industrial garden」で体験していただきたい。

（文：わく）

Geometropolis

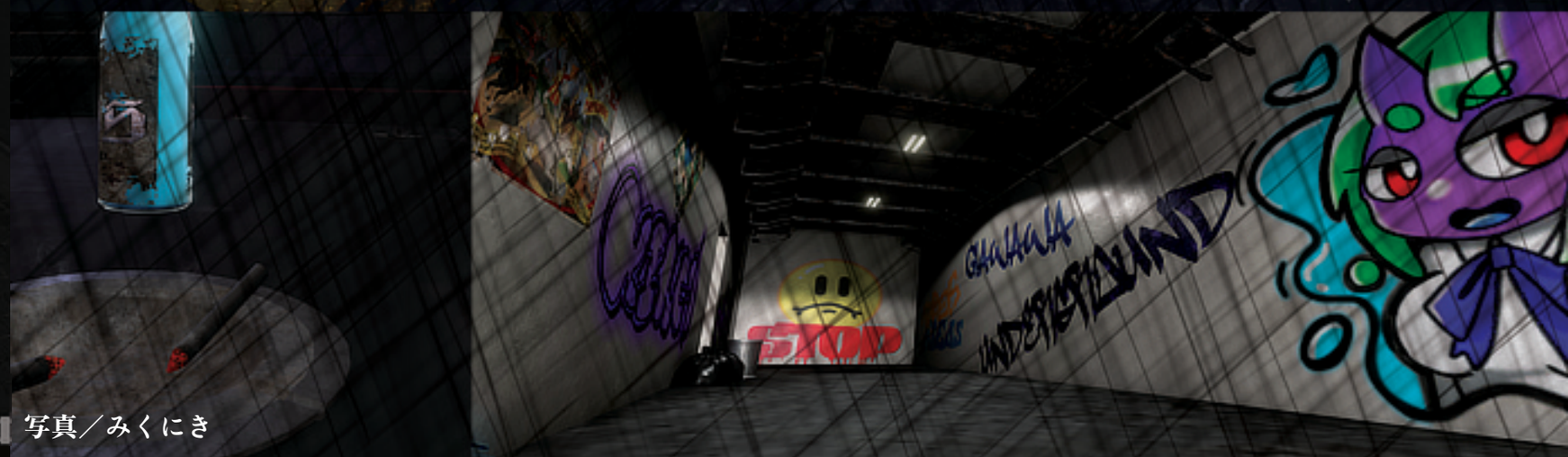
今回紹介するワールドは、著者にとって思い出深い場所だ。チュートリアルを除けば、Neosで初めて訪れた場所なのだ。

そもそも著者がNeosVRに来たキッカケは、VRChatにてVTuberの金熊きけん氏と出会ったことによる。著者は出張執筆なる、VR上でリアルタイムに小説執筆するイベントを行っている。ありがたいことに、きけん氏の出張執筆をすると決まった際に、「NeosVRがオススメ！」と仰ったので、新たなプラットフォームに飛び込んだ次第である。

その時、小説の舞台としてご提案いただいたのが「Geometropolis ジオメトロポリス」である。NEVIS Creation GroupというチームがMMCで制作しており、メンバーはGAWAWA氏、Jphonix氏、Sion222氏、Holy_Water氏、そして金熊きけん氏だ。

当ワールドは、2022年に開催した、Metaverse Maker Competition 2022（通称MMC22）にエントリーされている。MMCとは全世界規模で行われるNeos史上最大のコンペティション（競技会）だ。MMC22では全13部が存在し、アバターで着用可能なアクセサリーの部門、ツール、アプリ、ユーティリティーなどのTAU部門などがある。ジオメトロポリスは「ワールド・その他部門」にエントリーされ、優秀賞を取っている。つまり、世界的に認められたクオリティのワールドなのだ。

さて、ジオメトロポリスの旅路は、狭く薄暗いトイレの中から始まる。



写真／みくにき

NEVISのスタッフの名が書かれたポスターが貼られたドアを開くと、そこは紫煙の匂いが染み込んだバー。カウンターに置かれた瓶に入った、ネオンのように発光する青や黄色の液体。メニューにはガソリン、ザ・ブルーなどと表示されている。微かに聞こえる喧噪の中には、ガソリンを一気飲みしたアンドロイドの笑い声もあるのだろうか。

バーの出入口を抜け、階段を登る。頼りない蛍光灯が照らす通路。壁にはアナーキーなペイントアートが所狭しと描かれている。どことなく、ホラーワールドのような緊張感を覚えながら通路を抜けると――。

強烈な、生暖かいビル風が吹き抜けた。そこは広場、ドラム缶や廃車が燃え、街灯代わりになっている。都市の大通りに通じる道路は封鎖され、壁の向こうには毳々しく主張するネオンサインの数々。天を見上げると、天地逆転ビル群が夜空を遮っていた。さながら都市全体を覆う「天井」のように。気が遠くなるほど広大な都市のはずだが閉塞感ばかりが支配するサイバーパンクの世界。

広場の奥には、メタリックで巨大なゲートがある。傍にある赤いボタンを押下すればゲートが開き、内部に入ればエレベーターが上昇を始める。窓から見下ろすジオメトロポリスの景色。地下バーに通じる広場が小さくなり、ここが巨大都市だと感覚的に理解できた。昇り詰めるような高揚感、そして解放感。

「天井」と同じ高度まで上昇すると、都市を一望できる窓がなくなった。まもなくエレベータートが停止し、ゲートが再び開く。

そこは陽気なBGMが流れるゴンドラエリア。壁のスクリーンには、EDMが流れるクラブのように、煌びやかな映像が流れている。ゴンドラに乗って、レバーを降ろせば走り出す。一直線に壁を伝うネオン管にて、断続的に緑や水色の光が走る。ゴンドラで疾走する時間は長く、光を追いかけるシチュエーションは幻想的ですらあった。

そして辿り着く第二のエレベーター。円形の台座に乗って、更なる高みへと上昇する。半透明のチューブ越しに、広場から見上げた「天井」が上から下へ通過していく。なるほど、本当にビルが逆さまになっていたのは、見間違いではなかった。それどころか、「天井」は二層にも三層にもなって、それらの上部にもビル群が繁茂していた。

（ここで流れるBGMは、403.(금단/어두운) TorchLight氏のSADである）

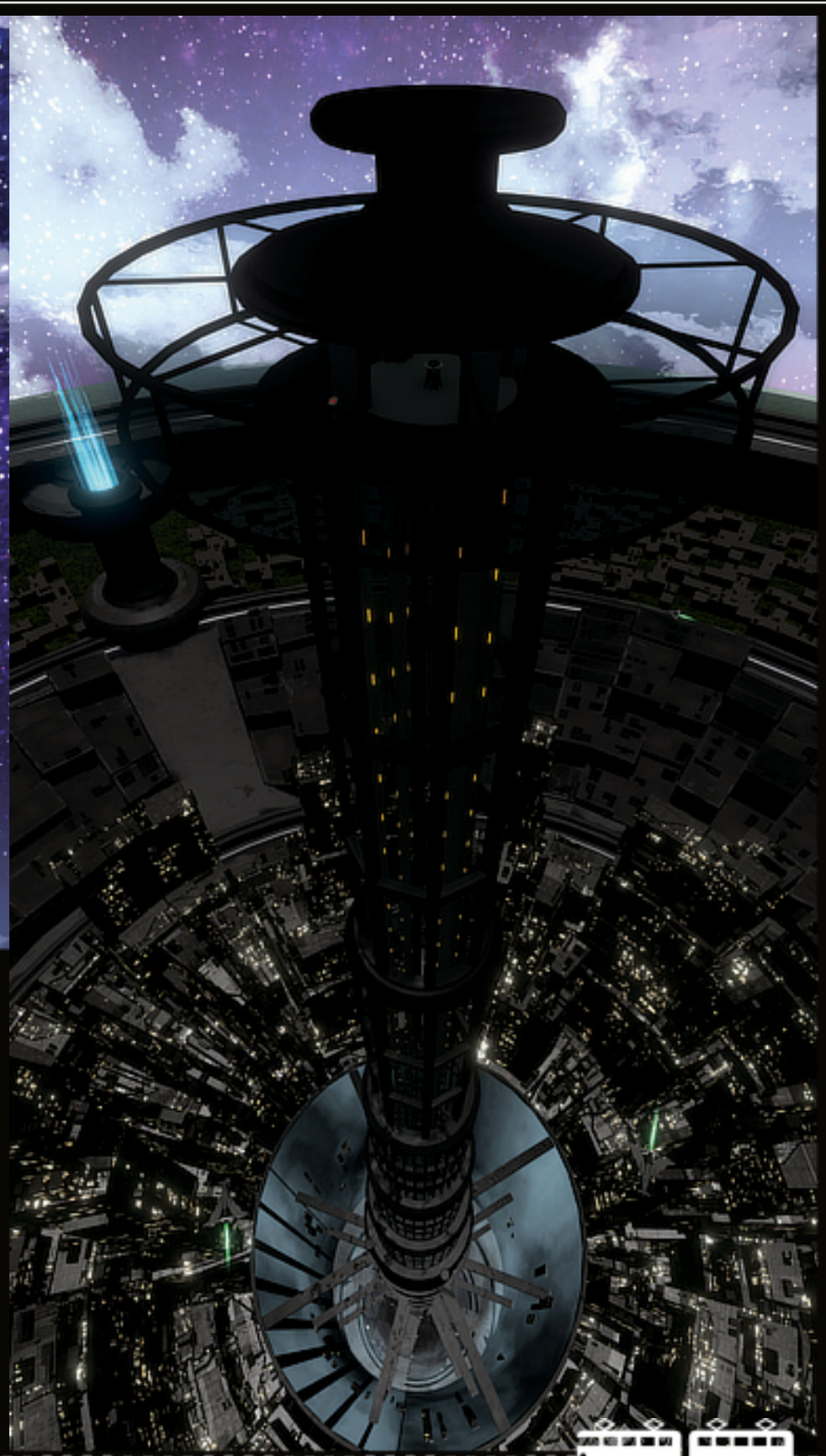
窓の外には満点の星空が。流れ星が無限に降り注ぐ。宇宙は、孤独感を催すような、黒色ばかりではなかった。星雲によって滲んだ紫色や、星々でさえ包み込むような淡く白い雲が、鮮明に見える。

ガラス張りの床を見下ろす。「天井」だったものすら、箱庭のように小さくなっていた。ジオメトロポリスを囲む巨大な壁。地上では見ることが叶わない星空も、壁の向こうでは際限なく続いている。

広大でありながら閉鎖的な都市の旅路、その果てに得られる解放感。文字を伴わない物語性こそが、優秀賞に選ばれた所以だと、個人的には感じた。是非、ソロでも、グループでも、このサイバーパンクの世界を楽しんで欲しい。

（文：sun）

To the next PLATFORM.



一瞬目の前が暗くなって、花火のようなパーティクルで埋め尽くされる。直後、哀愁漂うピアノの旋律が聞こえ、ジオメトロポリスの頂点に位置する展望台に到達する。

写真／ニッソ編集長

XXX-XXXX

宛先のない手紙

文：ニッソ編集長

Real World

住宅街の印刷所

拝啓

ご無沙汰しております。こうやってお手紙を書くのも久しぶりになってしまいました。ずっと、お手紙を書こうと思っていたのですが、いざ筆をとると、話したいことが多すぎて、何から書けばいいかわからなくなってしまって、結局書かずじまいになってしまっていました。

何を書けばいいか、何を話そうかと考えていたのですが、ちょうどあなたとよく散歩していたあたりを歩く機会があったので、そのことについてでも書いていこうかなと思います。その時に撮った写真も同封しておいたので、それを見ながら、懐かしんでくれたら幸いです。

思い返せば、私たちはいつもこのあたりを歩いていましたね。特にやることもなくて、時間だけは持て余していた私たちは、どうでもいい話をしながら散歩していました。あなたが『道と街はそれだけで娯楽』と言っていたのを今で

住宅街の中の印刷所周辺。ごく普通の閑散とした街並み。近くに紙の束が積まれている。

も覚えています。その時は、なにカッコつけたことを言ってるんだろう、と思っていましたけど。

改めてこのあたりを、一人で歩いてみると、新たな発見がありました。あなたは気づいていたでしょうか？実はこのあたり、普通の住宅街みたいですけど、小さな印刷所が点在しているのです。町工場、というには工場っぽさがないですが、よく見ると一般のオフィスでは見ないような印刷の機械（活版印刷の機械なのでしょうか？）が置いてあって、裁断していない紙の束がまとめて置いてあったりします。多分、随分昔からあったのでしょうが、当時の私たちには見えてなかったのだと思います。

大通りに面したところに、普通の住宅の並びの中に、あなたが水風船をぶちまけていた児童公園から見える場所に、閉めてしまった商店の隣に、小さな印刷所がありました。流石に、何が書いてあるのかを見ることはできませんから、こうした印刷所で印刷されたものがどういった本になって、どういう書店に置かれるのかはわかりません。紙の感じからすると、雑誌ではなさそうですから、もしかしたら、あなたが買う本になっているのかもしれません。

しかしまぁ、あんな小さな街の小さな印刷所で作られた本が、もし本当にあなたの街まで届いているとしたら、なんだかおもしろいですね。多分、原稿は日本の色んなところに住んでいる、色んな著者が書いていて、それが整理され

印刷所周辺。街のいたる所にも紙の束や運搬用のパレットなどが置かれている。

印刷所の建物。工場というより、小さなオフィスに近いようだ。

て小さな印刷所で形を得て、もう一回日本の色んなところに出ていくのです。原稿の終着点であり、本の出発点があのあたりの印刷所だ…というと、かつてのあなたのように、カッコつけすぎでしょうか。

さらにカッコつけた言い方にしてみましょうか。日本各地から集められた文章という「意思」が、小さな街の小さな印刷所に集められて、日本各地に散らばっていくのです。きっと各地に散らばった本を読んだ人たちも、その本から多かれ少なかれ影響を受けて、今までとは違う人間になっていくのです。こう考えると、あの印刷所は人間を変える可能性を集めた場所であり、あの街は人間を変える街、と言えるのかもしれません。

あるいは、印刷という行為は、「過去を焼き付ける」ものでもあるかもしれません。一度印刷されてしまったものを書き換えるのは難しいですから、ある文章を紙に印刷するというのは、その時伝えなくてはいけないことや気持ちといったものを固定してしまうことになります。今、電子的にいくらでも文章が書けて、あとからどれ

印刷所の近くには運搬用のウォークリフト。紙の束など運ぶ時に使われる。

道と街

幼い頃からいつも歩いていた「道」
緩やかにいつも変わっていた「街」
いつも歩いていた場所でさえ、今歩くと新しい発見がある。

そうして、緩やかに変わっていく街の中で、昔の面影を見つけてしまうということは、「大人になった」私が「若かった」私たちの面影を見つけてしまう、と言えるのではないでしょうか。

きっとあなたがまたこの街を歩くときには、「大人になった」あなたも新たな発見をし、「若かった」あなたの面影を見つけるでしょう。もしそんな時が来たら、どんな街の姿が見えたか、ぜひ教えてください。

書き始めたら、思ったよりも長くなってしまいました。あれほど書くのに悩んでいたのに、一度書き始めるとこんなにも書けるものなのですね。今回はこれぐらいにしておきます。また、手紙を書きます。それでは、また。

敬具

過去を焼き付ける

印刷とは「過去を焼き付ける」もの。
一度印刷されると書き換えることは難しい。

だけの修正を入れてもその痕跡が残らない時代に、印刷して過去を焼き付けること。これはとても恐ろしく、でも大切なことかもしれません。

今、「過去を焼き付ける」という言葉を書きましたが、私にとってはあの街全体にも「過去を焼き付けられている」ように思います。あの看板は変わっていないなとか、あの建物は建て変わってしまったなとか、そういうことを思います。

少し前の部分でも書いたように、確かに、今になってあの街を改めて歩いてみると、昔は見えていなかったものが見えるようになります。春も夏も秋も冬も、いつもいつも歩いていたあの場所でさえ、今歩くと新しい発見があるのです。視野が広がって、色々なものが見えるようになるので、「道と街」の見え方が変わってくることは、もしかしたら「大人になった」ということなのかもしれません。

station

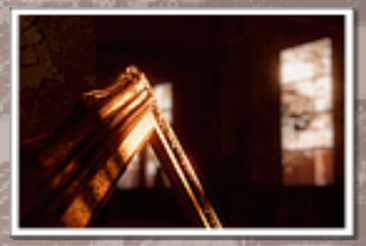
Gravure：工業都市 製鉄所 SteelWorks CwanFactory

撮影：オージュ

VR CHAT

Twilight Cherry Blossoms

執筆：ヤマノケ
撮影：Tokikaze



cluster

Industrial garden

執筆&撮影：わく

neos

Geometrololis

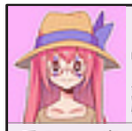
執筆：sun
撮影：みくにき

早稲田鶴巻町・印刷所街

執筆&撮影：ニッソちゃん

感想などは
#Platform通信欄
へぜひお寄せください！

Platform Vol.5 あとがき



ニッソちゃん
編集長

電脳の歯車が回る工場は、今日も何かを生み出すことを待って、そこにたたずんでいます。工場街を抜けると、この列車は「梅雨」へ向かいます。お手持ちの切符を無くさないように。

sun
ライター

最近、いくつかの場所で先行して印刷した実本を置かせていただいておりますが、とても好評で嬉しいです！ ありがとうございます！

わく
ライター/校正

工場の廃墟と中華とサイバーパンクとなると、今は亡き香港の九龍城砦を連想します。現地旅行した時は綺麗な公園に整備されてたな……。

オージュ
カメラマン

機械のもつ圧倒的なパワーを全身で感じる場所が工場だなあと。一歩間違えると危険な力であるという実感もまた…

Nag
校正

本号を契機にふとロボに会うべく人生数十回目『クロノ・トリガー』を改めて起動しました。続編『クロノ・クロス』も至高。

思惟かね
編集/デザイン

５冊も作るとデザインのネタも息切れしてきますが、今回は斬新なテーマのおかげで新しい試みができました。これからもそういう向上心を忘れずにいきたいです。工場だけに。

みくにき
カメラマン

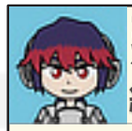
Neosに初めてログインした時に感じた「未来感」のようなものを改めて全身に浴びることが出来るワールドでした。~~たまには真面目なことも書きます。~~

ヤマノケ
ライター

おとこのこだからどうしても「旧式の量産型」とか「ピーキーで素人には使えない機体」とかにわくわくしてしまう……

Tokikaze
カメラマン

実は廃墟好きでして、昔はよく廃墟探索に行ったりしてました。取り残された雑貨や捲られなくなったカレンダーを見た時に感じるノスタルジーは何物にも代え難い癒しですね。



燕谷古雅
編集/デザイン

町の自慢ではないですが、私の町にはダジャレばかりの変わった名前が多い農業機械が製造されている工場があります。

STAFF

編集長｜Editor Chief
ニッソちゃん

誌面デザイン｜Graphic Design
思惟かね
燕谷古雅

校正｜Proofreading
Nag

執筆｜Writer
ヤマノケ
わく
ｓｕｎ
ニッソちゃん

撮影｜Photographer
オージュ
Tokikaze
みくにき
ニッソちゃん
わく（裏表紙）

Platform Vol.5 【機械と工場の世界】
発行：Platform編集部 (platformvirtualreal@gmail.com)
第一版(2023/5/1)

To the next JOURNEY.

2023. 5. 1

Our Journey Continues...

Platform

Vol.5 機械と工場の世界